

初めての古文との出会い

— 『伊勢物語』 って何だ!? —

小 榊 雅 典

一．はじめに

本校、広島県立倉橋高等学校は広島県の最南端、倉橋(長門)島の南に位置し、総生徒数一八六名、各学年二クラス編成の全日制普通科高校である。

総じて生徒の学習意欲は極めて低い。しかし、無論のこと、元々生徒の学習意欲が低いわけではない。これはこれまでの授業において置き去りにされることにより低下させられたものである。生徒は誰もが授業中に主役でありたいと願っているのだ。

しかも、彼らは考えることの喜びを知らない。彼らは自己の考えを認められる機会にあまりに恵まれなかった。彼らは考えるためにも、読む・書く・聞く・話すことが大切であることを知らない。

だからこそ考えなければならぬのだ。

だからこそ認められる機会を与えられなければならないのだ。

だからこそ読むこと・書くこと・聞くこと・話すことを体得しなければならないのだ。

私は本校に赴任して二年目になる。昨年度は生徒との人間関係もつくれず、授業も成立した数を数えて片手にさえ余るほどであった。しかし、本年度は多少状況が変わってきた。授業が成立しないのはたんに生徒のみの責任ではないことが私自身に自覚できるようになったときから、私の授業は蘇生を始めたのである。

二．「芥川」の実践

↳ 『伊勢物語』 って何だ!? ↳

(本年度の実践)

① 教材選定の理由

本校の国語科でも、一年生段階で古典の基礎を教えている。基礎といっても、

古文とは何か。

漢文とは何か。

歴史的仮名遣いとは何か。

歴史的仮名遣いに慣れよう。

※漢文の訓読については学習しない。

といった程度のものである。生徒の実態にに応じて『宇治拾遺物語』を読ませることもあるが、現代語訳を板書して終わりとすることが多かったようだ。したがって、数多くの生徒は古典の世界を知らないまま、また古典の基礎知識も忘却の彼方に置き去りにして二年生を迎えることになる。いわば、二年生の古典の授業は振り出しに戻った状態なのである。そこで、二年生における古典の授業は古典に親しむことを第一の目標としなければならぬ。

また、二年生の時期と言えば中だるみの時期である。ところが一方では、学校の雰囲気や教職員によく慣れてくる時期でもある。殊に本校の生徒は、人を大切にすることを徹底した指導を受け、自己と他者及び他者と他者との間に交わされる多様な人間感情が何であるかを学ぶ機会を多く得ている。しかも、これまでの成長段階で他者に何かと遅れをとりがちであったため、彼らは機敏にもかつ鋭く他者の感情を読み取ることができるようである。この生きる力は看過できない。そういったことから、多種多様な人間感情を扱った教材が適当であると考えられる。なかでも思春期の真つ只中に素朴に生きる生徒は、男女を問わず、

恋愛感情にはより敏感である。『伊勢物語』を貫く「愛の発露」を本校の純真な生徒は純粹な「心」で感受するに相違ない。「芥川」の主人公である「男」が体現した「奪い去る愛」が彼らの心を大きくゆさぶるはずである。論理的思考や深い洞察を要する教材よりは生徒の感受性に直接に働きかけてくれる感覚的な教材が相応しいのだ。こういった教材ならば、生徒の思いが表現されやすくなるであろう。と同時に、教授者の側においても生徒の思いを受け容れ、認めてやりやすくなる。生徒を主人公に据える好機である。

以上の理由により、私は「芥川」（『伊勢物語』）を本実践の教材として選定したのである。

② 学習指導過程と学習指導の実践

a 学習の対象

対象学年 広島県立倉橋高等学校 二年生

二クラス 計六一名

(A組 男子 一八名 女子 一三名・

B組 男子 一八名 女子 一二名)

指導時間 各クラス四時間扱い

指導の時期 一九九四年五月

b 指導の目標

ア 登場人物の人物像を読み取らせる。

イ 一つひとつの表現を大切にしながら、登場人物の言動に着眼させることによって、登場人物の心理を明らかにさせる。

ウ 古語に親しみ、古文独特の言い回しに慣れさせる。

エ 充実した音読が行えるようにさせる。

これらの観点を網羅した上で、生徒が少しでも古文に親しみ、興味を抱く契機となることが本実践の最大の目標である。

c 使用したプリント

ア 本文を掲載したプリント一枚

イ 読解のための授業学習プリント三枚

【資料三・四】

尚、アを用意したのは、本教材が投げ込み教材だからである。

d 学習指導過程とその実践

資料参照 (一) (二)

尚、授業の展開上、以下の点に留意した。

ア 便宜上、本文を前後半に分けることにした。

前半部 冒頭「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。

後半部 行く先多く白玉か(…の和歌)

イ 第一・二時、第三・四時をそれぞれ二時間一続きの授業として展開した。それでなくても集中力が切れやすい生徒たちであるから、二時間を一続きとして授業を展開することは至難の業である。

しかし、授業が展開途中で中断することは、生徒の思考をも中断させると考えてのことである。

ウ 第三・四時のプリント教材を思い切って一枚(本文のプリントは別)にした。つまり、「男」の心理図を削除したのである。本来ならばこのプリントが授業の核となるはずなのだが、第一・二時の実践の結果、

○ 本校の生徒の場合、書く作業にのみ捕われて、思考が疎かになる。

○ 三枚ものプリントを同時に使用すると、授業の展開において当惑する(今、どのプリントを学習しているのかついて来れない)数多くの生徒を生んでしまう。

○ プリントの持つ記録性からプリントにするに越したことはないが、何はさておき「男」の心理を殊に考えて欲しい。
と考えたためである。授業の生命線とも言えるこのプリントなしで授業を展開することにはかなり心を悩ませた。その上での決断である。

③ 「芥川」の学習指導過程とその実践

a 第一・二時の指導目標

ア 『伊勢物語』の文学史的位置付けについて理解させる。

イ 歴史的仮名遣いに注意して、正しく音読できるようにさせる。

ウ 登場人物がどのような人物として描かれているか読み取らせる。

エ 登場人物の心理を一つひとつの表現を手掛かりに想像させる。

b 学習指導過程

【資料一】参照

c 学習指導の結果と考察

『伊勢物語』って何ならあ。わしらく、
伊勢海老のほうがあえわいのおー！

この生徒の発言が授業のスタートとなった。『伊勢物語』の文学史的位置付けの説明を受ける生徒の表情は、いつもと変わらず、板書されたものを写しておけばよいといったものである。先行きが察じられたが、音読はしっかりと行えた。女子生徒の声が小さいのが気掛かりだったので、「私くらいの声ならば、教室の隅々にまで届くはずだ。できるだけ私の

声の大きさに近づけて頑張れ！」と、繰り返しやり直しを求め、粘り強い指導を試みた。その結果、音読の楽しさ(読むことや他の生徒の音読を聴くこと)が契機となり、授業に集中する生徒が多かったようだ。音読は多く取り入れるべきであるとともに、時間をかけるべきである。

読解指導に入つての発問により、ある程度、生徒の思いを引き出すことができた。しかし、挙手をして発言をする習慣が生徒の身についていないため、いらない発言(私語の類)を含めて、発言をする生徒が偏った傾向がある。その意味では、生徒一人ひとりが主人公になりきれなかった。また当初より予測されていたことではあるが、発言は行いが、発問に伴う自己の考えや思いを文字にできかねる生徒や自己の思いに自信が持てないがためにプリントに記述できない生徒が大半であった。なかには、無論、発問に答えることを面倒がる生徒もいた。したがって、発言してくれた生徒の考えや思いを板書するしかなかく、総じて部分参加の授業となってしまった。その上、黒板のスペースの関係から現代語訳を板書できず、「男」と「女」の心理図と重要文法・語釈を中心に板書したため、現代語訳を口頭で行うこととなってしまったのである。その結果、古文を現代文に置き直すことができず、日本語の持つ奥行きを感

じることができない生徒をも数名かつくることとなつた。

次なる課題は、話し方（聞き方まで指導ができればよいが、生徒の現状を鑑みるかぎり不可能に思える）の指導である。

そこで、私は休憩時間と放課後を利用し、本日の授業に関わる生徒との個人面接を行うことにした（三日を必要とした）。堅苦しい雰囲気にならないように気を配りながら、次に記す四点を質問した。

1 授業の感想

2 何が頭に残っているか。（何がわかって何がわからなかったか。）

3 授業中に試みた発問に対してどのような思いを持っていたか。（時間の都合上、全ての発問について尋ねることはできなかった。）

4 次の授業への要望

私が常駐する準備室に一人ひとりを呼んでの面接であった。普段、本校の生徒にとって、準備室に呼ばれることは生徒指導の対象となったことを意味している。授業に関わる面接だと認識しながらも、多くの生徒の口は重たかった。その生徒の反応は次のとおりである。尚、掲載は順不同であり、発言の内

容の多いものだけを採り上げた。

1 について。

○ 発言できたのでおもしろかった。

○ いつもの授業とは異なった教室の雰囲気で何か不思議な感じがした。進学校みたい。

○ 書くだけの授業よりはよい。

○ 三枚もプリントを配布されると複雑で困る。

○ 「男」と「女」の心理図が複雑で、授業のスピードも早いから、どこに何を書いてよいかわからないことがあった。

○ 久しぶりに頭を使って疲れた。手もだるい。授業の善し悪しについては、賛否両論あるようである。しかし、授業はおもしろくないものと思いつている生徒に、若干名であれ、授業はおもしろいものなんだと思わせたことは、本実践の唯一の成果であると思つてよいのかもしれない。

2 について。

○ 恋する人の気持ちはいつの時代も変わらない。

○ 「男」はここまでする（「女」を盗み出したことを指す）必要があるのか。「女（性）」は他にもたくさんいる。

○ 「露」を知らないことが不思議だと思つてい

たけど、先生の説明（「宮廷の女性」についての説明）でわかった。

○ 「男」にとつて「女」はよほど魅力的だった。
○ 一見すると、何でもない表現に意味があることがわかった。

○ 文法事項（「けり」と「の」）が頭に残った。

○ 「かれは何ぞ」の表現がおもしろい。

○ 「よばふ」（の語の組成）がおもしろい。

○ 「かれは何ぞ」だけの表現で「女」も「男」を想っていると考えるのはおかしい。

○ 文法事項がよくわからない。

一つ目・三つ目・五つ目の発言は、本校でも学力の高い女子生徒のものである。図らずも、この女子生徒は面接終了時に準備室の出口に立って、「ああ、（言うことを忘れていました）。古文を読んでみたい気分になりました。」と言ってくれたのである。せめてもの救いであった。

一方、わからなかった点については言わない方が無難と判断した生徒が多かったのか、回答が圧倒的に少なかつた。

3 について。

授業中においても、数人の活発な生徒が発問に対する自己の思いを述べてしまうと、他の生徒は口を

つぐむ傾向にあつた。しかも、数人の生徒の発問に対する思いは、私が授業以前に予測した生徒の思いとほぼ一致するものであり、それ以上の生徒の思いを得ることができなかったのである。この面接においても生徒たちは模範解答を繰り返すことに終始してしまつたのだつた。

延いては、これは私の発問が回答を限定する性質のものであつたことを意味している。発問づくりの難しきをも改めて痛感した。

4 について。

「別ありません。」「わかりません。」「今日のままでいいです。」の三種類しか回答は返らなかつた。私は、生徒指導係の教師でもあり、国語科の教師でもある。その狭間に生起する苦悩がまたもや髣髴としてきたのである。

尚、第三・四時の指導後にも本日の授業に関わる面接を予定していたが、生徒指導上の問題で急に身辺が忙しくなり、第二回目の面接は中止せざるを得なくなつた。

d 第三・四時の指導目標

ア 正しい音読ができるようにさせる。

イ 「男」の行動を左右する悪条件とそれが男の心象風景となつてゐることを理解させる。

ウ 切迫する「男」の心情並びに絶望の淵に追いやられた「男」の心理を読み取らせる。

エ 「男」の心情が凝縮された和歌を読解し、和歌の働きについて気づかせる。

e 学習指導過程

【資料二】参照

f 学習指導の結果と考察

本時の授業展開は、第一・二時も同様、ほぼ学習指導案通りであつた。このことは十分に生徒の思考を引き出していない授業であつたことを物語るものであろう。活発な意見が交換される授業であるならば、指導案通りに授業が展開することは稀である。

発問も「『男』の心情を想像してみよう。」と極力生徒の思考を限定せず、生徒の発言を授業の中に採り入れられる形のを試みたが、活発な意見が交換されたわけではなかつた。一部の固定された生徒から一ないしは二・三単語で意見が述べられる程度であり、日常的に話す練習が必要であることを痛感した。これまでの授業の中で置き去りにされることにより口を固く閉ざしてしまつた生徒が公の場で発言

することは、理想であるとともに最大の課題であることを改めて自覚したのである。

総じて、生徒は考える姿勢を示した。それは、「あばらなる倉から何をイメージするか」（授業展開5）の発問に対して、「鬼が出そうなところよ。『鬼ある所とも知らで』と書いてあるでえ。」と生徒が返してきたことに象徴されている。本文を読みこなそうとする姿勢が如実に表現されていて素晴らしい。一つひとつの表現を大切に読み手を育てていかなければならないのである。

（広島県立倉橋高等学校）

1 プリントを配布する。
 (本文のプリントと二枚の学習プリント【資料三・四】)

2 本時の学習目標を確認する。
 ○上記「第一・二時の指導目標」参照。

3 「伊勢物語」の文学史的的位置付けについて理解させる。
 ○ア、サの正解を板書しながら、補足説明を行う。

4 指名による音読をさせる。
 ア 6名(男子3名・女子3名)に指名する。
 イ 最初の男女2名ずつは、前後半に分けての音読、残りの1名ずつは全文を音読させる。
 ※教授者による寸評を忘れない。
 ※登場人物が誰らか、意識させながら音読をさせる。
 前半部の読解

5 学習プリントで本文の空欄補充を行い、本文の確認を行う。
 ※読解に関わる語を空欄とする。
 ア 本文のプリントを参考にする旨を告げる。
 イ 作業時間を3分とする。

6 空欄補充(5)の確認を指名によって行う。

7 登場人物の整理を行う。
 ア 本文①を確認する。
 イ 助動詞「けり」を説明する。
 ウ イより本文は語り手の間接経験であることを説明する。
 本文②より「女」の描かれ方を読解する。

8 本文①本文を読んでみて、この「女」の人が描かれていそうなところはどこか。
 ア 同格の「の」・「え」否定語・助動詞「まし」の説明を行う。

9 本文③・④を読解し、「男」の心理を想像する。
 本文③について。
 ア 「よばふ」・「わたる」を説明する。
 ア 本文③について。
 本文④について。
 イ 本文④について。
 a 「からうじて」の読み・意味を確認する。
 本文⑤について。
 a 「からうじて」の読み・意味を確認する。
 それを想像してみよう。

10 本文⑥・⑦・⑧を読解する。
 ア 本文⑥の内容を確認する。
 イ 本文⑦の言い回しについて説明する。
 ウ 本文⑧の内容を確認する。
 本文⑥の内容を確認する。
 本文⑦の言い回しについて説明する。
 本文⑧の内容を確認する。
 本文⑥の内容を確認する。
 本文⑦の言い回しについて説明する。
 本文⑧の内容を確認する。

11 本時のまとめと次時の予告

【発2】 何があつて、「男」はこの「女」を妻として迎えられそうもなかつたか。想像してみよう。

【発1】 「男」の行動が描かれているのは、本文の何番・何番・何番か。
 ア 本文③について。

【発2】 この表現から「男」の「女」に対するどのような思いがわかるか。
 イ 本文④について。

【発3】 a 「からうじて」の読み・意味を確認する。
 この表現には、「男」のある気持ちがにじみ出ている。
 それを想像してみよう。

【発4】 「女のえ得まじかりける」人だから「からうじて盗み」出さなければならぬのだが、一体この「女」は何者なのだろうか。

【発5】 本文「いと暗きに来けり」の現代語訳を確認する。
 本文「いと暗きに来けり」の現代語訳を確認する。
 本文「いと暗きに来けり」の現代語訳を確認する。
 本文「いと暗きに来けり」の現代語訳を確認する。

【発6】 汚く暗い川を行くところから、逃げる「男」のどのような様子が目に浮かぶか。
 a 「芥川」・「率る」の説明をする。

【発7】 本文⑥の内容を確認する。
 本文⑦の言い回しについて説明する。
 本文⑧の内容を確認する。

1 一枚のプリントを配布する。
2 本時の学習目標を確認する。

○上記「第三・四時の指導目標」参照。

3 指名による音読を行う。

○第一・二時と同様の要領で音読をさせる。

※「女」の身に何が起こるのか意識させながら音読させる。

【後半部の読解】

4 本文⑨・⑩・⑫・⑬を読解し、登場人物たちに降りかかる悪条件を理解する。

ア 本文⑨について。

イ 本文⑫について。

a 副助詞「さへ」の文法的な働きと本文中における役割について考えさせる。

ウ 本文⑬について。

a 四つ目の悪条件であることを理解させる。

b 「夜も」(本文⑩)や「雨も」の「も」の働きに注意させる。

5 悪条件ゆえの「男」の行動を確認する。(本文⑭・⑮)

【発1】「あばらなる倉」から何をイメージするか。

6 目に映らない悪条件に「鬼」の存在があったことを理解する。(本文⑰)

ア 「で」の文法的な働きを説明する。

7 夜明けを心待ちにする「男」の心情を読解する。

ア 「弓・胡籬」の説明をする。

【発1】「戸口にを」る「男」の心情を想像してみよう。

【補発】「弓」を何のために使うつもりか。また、「戸口」にいるのは何のためか。

8 「はや夜も明けなむ」(本文⑱)に親える「男」の心情を確認する。

ア 「なむ」の文法的な働きを説明する。

イ 7の【発1】を受けて、「男」の心情を再確認する。

9 「男」と「女」の身に起こった不幸な出来事を捉える。

(本文⑲・⑳・㉑)

【発1】「男」と「女」の身に何が起こったか。

【発2】「あなや。」を現代語に直すとうなるか。

【発3】「あなや。」は「男」に聞こえたのか。また、それがどの表現でわかるか。

※【発3】を受けて、「え：否定語」の文法的なまとめを行う。

10 不幸な事件後の「男」の行動を読み取る。

(本文㉒・㉓・㉔)

ア 「足すり」の語義を確認する。

【発1】このときの「男」の心情を想像しよう。

11 「白玉か」の和歌を読解する。

ア 過去の助動詞「き」と「けり」の働きについて知る。

イ 「消えなましものを」を文法面から理解する。

【発1】10―【発1】で想像した思いとどこが同じでどこが違うか。

ウ 和歌に凝縮された「男」の思いをまとめ。

12 既習の四つの悪条件(本文⑨・⑩・⑫・⑬)が「男」の心象風景でもあったことを考える。

13 本時のまとめと次時の予告

